

## 日本語文学における戦時性暴力の表象

The representation of wartime sexual violence in Japanese-Language literature

内藤 千珠子<sup>1</sup>

<sup>1</sup>大妻女子大学文学部

Chizuko Naito<sup>1</sup>

<sup>1</sup>Faculty of Language and Literature, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：ジェンダー，ナショナリズム，戦争

Key words : Gender, Nationalism, War

### 抄録

日本語文学のなかにはあらわれた戦時性暴力の表象を考察する。現代日本の暴力をめぐる構造を、ジェンダーとナショナリズムという視座から検証するため、学術的背景を概観した上で、問題の所在を明らかにし、今後の見通しと課題を提起する。戦時性暴力と現在の日常との連続性、植民地公娼制度と「慰安婦」問題の連続性、戦時性暴力が「恋愛」という物語形式を通して不可視にされる文化的構造について論じ、日本語文学における「花柳小説」というジャンルがもつ問題、文学が「慰安婦」の記号をどのように扱ってきたのかという問題を整理していく。戦時性暴力をあらたなかたちで描く現代小説における批評性を展望し、今後の課題を示した。

### 1. 現代的な暴力の構造とナショナリズム

日本語文学のなかにはあらわれた戦時性暴力を主題として考察することで、現代日本の暴力をめぐる構造を、ジェンダーとナショナリズムという視点から検証していきたい。本報告では、そのための準備作業として、戦時性暴力をめぐる学術的な背景、研究動向を整理し、日本語文学の領域における問題の所在を明らかにする。

2010年代以降のヘイトの時代にあっては、差異によって有標化された属性は容易に憎悪や中傷の標的とされ、SNSなどを通じて醸成された攻撃的メンタリティが文化的、社会的な環境として標準化されている。憎悪に支えられた攻撃性は、世界を二元化して敵と味方を境界によって分断する力学を強化し、日常のなかには「戦争」の比喩があふれかえっている。比喩として用いられる「戦争」の背景には、近代的戦争の論理のなかで構築されてきた認識の回路が存在している。その回路をジェンダーをめぐるナショナリズムの暴力が支えているという視点から考察し、問題の所在を可視化することで、暴力から隔たるための思考のフレームを構築する契機を模索していきたいと考えている。

そうした考察を展開するために、ジェンダーをめぐるナショナリズムの暴力がもっとも明確なかたちで現出した戦時性暴力を主題とし、現実の戦時性暴力を、文学がフィクションとして描こうとしたとき、どのような物語が選択されるのか、その物語の風景がもつ批評性をとらえていく必要があるだろう。本報告では、近現代の小説言語が描き出すフィクショナルな想像力をとおして、暴力に依存しない思考のフレームを構想していくための見通しと課題を示しておきたい。

### 2. 戦時性暴力と日常世界

戦時性暴力をめぐるのは、日本ではとくに、「慰安婦」問題を中心に学術的な議論が展開されてきた。そのなかで重視されていることは、戦時性暴力を現在の日常との連続性において想像し、思考する観点である。たとえば、歴史学研究会・日本史研究会が2013年に合同で開催したシンポジウムを起点として編まれた『「慰安婦」問題を／から考える』では、「戦時性暴力を戦時の局面に限定せず、平時の日常世界とのかかわりで理解する視点」の重要性を強調した上で、「三つの含意」とし

て「慰安所をめぐる問題は、戦時に限定されたことではなく、日常世界と深く結びついていたということ」、「歴史研究者や歴史に関心をもつ人にとって、戦時性暴力は自分と無関係な戦時に限定された彼方の出来事ではなく、あらゆる研究課題や歴史のなかの日常世界とかかわる出来事であり、此方の問題だということ」、「慰安婦」問題が私たちに突きつけるジェンダー視点は、すべての歴史研究者や歴史に関心をもつ人が共有すべき問題であるということ」を提起している<sup>[1]</sup>。

また、軍事主義とジェンダーという主題を明快に可視化したシンシア・エンローは、「いかなる軍事化プロセスも、女らしさに関する特定の考えと女性の労働や感情に依存していること」、「女らしさ」と女性は戦争や軍事において瑣末な問題として扱われ、「戦争というメインイベントは男らしさの遂行であり、エリート男性によってなされる公的な選択だと考えられている」が、むしろそのことが「軍事化をスムーズに進められるような役割へと女性たちを巧みに操っていく決定」を円滑化してきたのであり、「女性間の差異を維持することによって、女性の軍事化が容認されてきた」のだと論じている<sup>[2]</sup>。

こうした軍事主義が目に見える領域でも不可視の領域でも継続的に進行しているというエンローの指摘は、戦争や戦時性暴力、軍事主義とジェンダーの問題を具体的に考察する学術的議論を触発してきたといつてよいだろう。

「慰安婦」問題を戦時性暴力というテーマのなかで検証した高良沙哉は、軍隊と性暴力の関係について、「軍隊は構成員である軍人たちが戦場において、より暴力的にふるまうことができるようにするために、日々の訓練の中で、暴力的な男性性を増強させている。戦場において、他者を抹殺するため、他者を物質化するトレーニングを受ける。そして、実際の戦場では、敵を攻撃する手段として、性暴力が選択される」と述べ、「軍隊が、具体的な戦場において、より暴力的に戦い、敵を攻撃し破壊する優秀な兵士になるために、平時における性暴力を必要とする。差別主義的な特徴を有する軍隊においては、性暴力の矛先が、より力の弱い者に向けられるのは当然のことである」と論じている<sup>[3]</sup>。

占領期の米軍と売買春の問題を検証した平井和子は、「軍隊と性暴力は密接に関連し合い、兵士の

性もそのメカニズムのなかに組み込まれている」と指摘し、「兵士のレイプ犯罪や暴力的な買春行為の原因を、兵士個人の性的衝動として自然視するのではなく、軍が意図的に作り出す構造的なものとして見るのが重要である」と論じている。「日本軍「慰安所」は、兵士の戦争への疑問や不満をそらすために軍によって設置が意図され」「日本占領による占領軍「慰安所」は、占領をうまく運ぶため日米間で女性が取引されたという、軍隊と性暴力の密接な構造」があるという点を検証すべきだと平井は強調している<sup>[4]</sup>。

これらの議論を踏まえると、ナショナリズムの根幹としての戦争と軍事主義が、女性身体を暴力の宛先として必要とする性暴力、すなわち、ジェンダー化された暴力を必然的に内在する構造をもっているということが理解される。すなわち、学術的な認識として、近代の帝国主義的な戦争を下敷きにしつつ、継続的に進行されてきた軍事化が、現在の日常のなかに蔓延する性暴力的な文化制度を構造的に支えているという視点が導き出されているということである。

次に、「慰安婦」問題を制度的に考察する観点として、近代日本の公娼制度との連続性で考えるべきだという観点がある。近代日本の公娼制度に内在される問題点については議論の積み重ねがあるが、藤目ゆきは「近代の公娼制度は、軍隊慰安と性病管理を機軸とした国家管理売春の体系であり、近代国家の建設—とりわけ強力な軍隊の建設—の利益と結合して誕生した制度である」と指摘しており<sup>[5]</sup>、さらに、「公娼制度の存在が日本軍「慰安所」に歴史的・社会的に土台を提供した」ことを強調している<sup>[6]</sup>。

加えて、公娼制度自体が植民地主義と結託した制度であるという観点も共有されている。藤永壮は、「帝国日本の性管理システムは、第一次世界大戦を契機に朝鮮人接客業者の帝国内移動（一部周縁地域を含む）という状況を生み出すことになった」と指摘し、「植民地公娼制度」という視点を提出したが<sup>[7]</sup>、林葉子は、「近代公娼制度の日本社会への導入とアジアへの伝播の政治責任の問題を考える上で、最も重視すべきことは軍隊との関係である」と述べ、「近代公娼制度と軍隊との関わりは、歴史のどこかの時点で始まったことではなく、公娼制度は、最初から軍隊のために近代化されたのであり、植民地主義をその本質としていた」

と論じている<sup>[8]</sup>。

林が指摘しているのは、公娼制度それ自体が備えた植民地主義的性質をとらえるために、「植民地公娼制度」という概念を積極的に用いることが必要だという観点である。「日本の植民地都市を特徴づけたのが、神社と遊廓」であり、「植民地の遊廓にはつねに日本人娼妓が存在」し、「植民地への日本式性売買の移植は、近代日本の移民現象の特質を示している」ことを考え併せると<sup>[9]</sup>、戦争と戦時性暴力の問題は、ナショナリズムが性暴力を内在する構造、そして植民地主義的暴力との複合的構造から考察されるべき主題だということは明らかである。

連続性をめぐる第三のポイントとして、暴力の宛先となる女性身体によって、実際に体験される出来事のなかに、多様性と連続性があるという点が挙げられる。上野千鶴子は、「性暴力は戦争にともなう物理的・構造的暴力の一部をなしており、強姦から売買春、恋愛まで、さらには妊娠、中絶、出産から結婚までの多様性を含んでいる。性暴力を強姦から売買春、恋愛、結婚までの連続線上に配置するのは、事実このあいだに連続性がある」と論じている<sup>[10]</sup>。

上野が指摘する「多様性」と境界を引くことの難しい「連続性」について、近代的物語の構造という観点から考えてみると、とりわけ「恋愛」という要素が物語のイメージの中核を担っていることがみえてくる。ヘテロセクシズムとホモソーシャルな社会構造を背景とした、近代の異性愛的物語形式のなかで、ヒロインとなる女性登場人物は、つねに潜在的な「恋愛」の主人公にほかならない。戦争時における戦場の物語であっても、日常世界における物語であっても、ヒロインの生きる世界に異性愛的な恋愛の風景が広がることに変わりはない。なぜなら、「日本近代文学」の時空に、女性が恋愛の「主体」となることで、経済的、精神的に自立するという物語定型が作動しているからである。

戦争という出来事に、ジェンダーの視点から迫って見たときに可視化される物語に、性暴力的なものが「恋愛」として理解されることを促す様式があるという観点は、近代のロマンスという形式、すなわち異性愛の物語において女性が恋愛のヒロインになるという形式それ自体が、性暴力を内包

していることを証立てる。したがって、たとえば、「新しい女」による恋愛の実践が、フェミニズム的な観点からみて望ましい物語形式を体現したものであったとしても、その裏面にはつねに恋愛に連続する性暴力的な力学が伴われざるをえず、物語構造に内在する正負の両義性を、ともに考察していかなければならないといえるだろう。

### 3. 近代小説における経済化されたヒロイン

日本の近代文学にあって、戦時性暴力の問題を検証していこうとしたとき、植民地公娼制度下における「娼妓」や「芸妓」をヒロインとする、いわゆる「花柳小説」というジャンルの考察と、「慰安婦」の存在がいかに描けなかったか、描けなかったかという問題の考察を連続させる視点が必要になってくる。

「花柳小説」に関して、佐伯順子は、日本の近代文学において、「死」や「狂」という非日常的なイメージを使って「純粹」な「愛」を描こうとする時に、はからずも芸者の姿が出てきてしまうところには、日本文学における芸者の非日常的存在感の根強さがうかがわれて興味深い」と述べ、「芸者」が物語の非日常的なヒロインとしての魅力をもって扱われてきたことを指摘している<sup>[11]</sup>。

また、尾形明子は、「売買春に支えられて多くの文学作品が書かれた。否定するのは易しいが、それらの作品の幾つかは今なお人の心を打つ」とした上で、「しかしそうであっても、社会構造の歪みを直視することなく、歪みの中で生きるしかない女たちをただ男のための美しい色彩として扱い文学とした作家たちに、文学が当然その根底において持たなくてはならない厳しい人間認識や批判精神が十分にあったとは思われない」と厳しく批判している<sup>[12]</sup>。

同じように批判的な文脈で、金井景子も、「『青鞥』が無期休刊に入った大正五（一九一六）年に起こった、いわゆる遊蕩文学論争は、日露戦後から大正初期という近代小説の成熟期において、花柳界とそこに生きる女たちが文学上の流派を越えて想像力の源泉として確かに機能したことを陰画として示すこととなった」と指摘している<sup>[13]</sup>。

現実には、「娼妓」が法的に自らの意志で職業を選択しているという言説上のトリックを背景に、賤業視され、差別を押しつけられる構造があったわけだが、「花柳小説」のジャンルにあっては、ヒ

ロインとしての娼妓や芸妓は非日常的空間にいる、非現実的な悲劇の主人公として、性的に対象化され、挫折することが予定された恋愛の物語を生きさせられる。すなわち、負の魅力によって価値ある登場人物になり、消費されることになるのだ。現実とフィクションを隔てる想像上の境界線に依存することで、近代の日本語小説の多くが、ナショナルリズムと結びついた性暴力を物語の素材として利用してきたというところに、大きな問題があるといえるだろう。

また、「慰安婦」と戦争文学の関係について、金井景子は、戦争の最前線に「軍需物資として配送された慰安婦が、日本軍将校の日常に深く食い入る存在であったことは疑い得ない」と述べた上で、「しかしながら戦後半世紀にわたって戦争体験を題材にした膨大な文学テキストが織り出されたのにもかかわらず、田村泰次郎、伊藤桂一、有馬頼義といったごく少数の人々の仕事を除けば、慰安婦たちを焦点化するどころか点描されたものを探すことすら難しい。彼女たちは多くの戦争文学の担い手たちから戦場における透明人間として扱われてきたといっても過言ではない」と論じていた<sup>[14]</sup>。さらに、金井の論も踏まえ、光石亜由美は、戦争を描いた文学テキストにおける「慰安婦」の存在について「描かれているとしても、戦争の悲惨さ、残酷さを慰めてくれる存在であったり、時には戦場の侘しさ、やるせなさを共有する戦友であったり、書き手である男性の願望が映り込んだ虚像と言えなくもない」と述べている<sup>[15]</sup>。これらの議論に、「慰安婦」と戦場の兵士たちの関係を擬似的な恋愛関係と見立てる物語的な想像力を批判的にとらえる視点をあわせ、暴力の構造を考察していかなければ、戦時性暴力の現代的様態を思考することはできないだろう。

「娼妓」や「慰安婦」として登場するヒロインは、性的に対象化され、商品としての価値によって経済化され、搾取の暴力を被る位置におかれている。同時に、男性登場人物や、男性ジェンダー化された読者共同体の視点から眺めたとき、肯定的な結末とは切り離された、恋愛的物語のヒロインとして措定されてもいる。近代小説の定型である、異性愛の恋愛という物語形式を、ナショナルリズムとジェンダーを交差させたときに可視化される暴力という観点からとらえ返していくことで、現代の暴力を考察するための新たな視座を得るこ

とが必要である。

#### 4. 現代日本語文学における諸相

現代における日本語小説についても、近代小説における問題編成を念頭に、戦争をめぐる証言や、記憶をどう受けるかといった主題も念頭において検証していくべきであろう。

一方では、戦時性暴力それ自体を、戦争の記憶として叙述した小説テキストを分析する必要がある。たとえば、柳美里『8月の果て』（新潮社、2004）には、「慰安婦」にされた被害の体験を女性の視点から描き出す構成が示されているが、中島京子『FUTON』（講談社、2003）や村山由佳『星々の舟』（文藝春秋、2003）などは、戦争を実際に体験した世代の語り手や視点人物が、戦時下あるいは占領期に娼婦的な人生を強いられたり、選択した女性と関わった男性の側の語りや視点が設定されている。直に体験したことに基づく当事者の記憶が、どのようなしくみを通して語られ、叙述されるのか、また、それを聞く側、受容する側のポジションがいかに関配置されているのかを分析していく必要があるだろう。

他方では、戦時性暴力が現代社会とどのような連続性をもっているのかを明らかにしていくために、一見したところ、戦時性暴力それ自体を主たるテーマとしてはいない小説に描かれる、戦時性暴力と日常的性暴力との連続性を批判的に可視化していくことも重要であろう。2017年以降、#Me tooムーブメントが世界的に展開されていることを背景に、これまで被害とは認識されてこなかった性暴力被害が、当事者たちの語る声によって可視化されている。小野寺あかねは、「日本軍『慰安婦』問題と現代の性暴力双方をつなぐ視点がいつそう深まり、性搾取のなかを生きる人たちの声を聞く姿勢を鍛える」ことの必要を述べている<sup>[16]</sup>。こうした観点を念頭に、現代小説のなかに描き出された、日常化する性暴力の風景を、戦争や戦時性暴力の論理と連続させて分析し、そこに共通する問題を可視化することで、思考のフレームを創出していくことができるだろう。もちろん、ナショナルリズムや戦争の論理と、現代的な性暴力が連結していることに自覚的な小説も多数存在している。暴力の連続性をフィクションのなかに鮮明に描き出すことによって、それが機能する力学や構造を認識することが可能となるといえるだろう。

今後、具体的なテキストの検証を通じて、暴力とは隔たった思考のフレームがもうひとつの別の選択肢として存在していることを、学術的な言語によって明確にしていきたい。

### 引用文献

- [1]長志珠絵・大門正克「まえがきー「慰安婦」問題と出会うために」歴史学研究会・日本史研究会編『「慰安婦」問題を／から考える』岩波書店, 2014, p.5-6.
- [2]シンシア・エンロー『策略 女性を軍事化する国際政治』上野千鶴子監訳, 佐藤文香訳, 岩波書店, 2006, p.223-224. [原著 2000]
- [3]高良沙哉『「慰安婦」問題と戦時性暴力』法律文化社, 2015, p.181.
- [4]平井和子『日本占領とジェンダー』有志舎, 2014, p219.
- [5]藤目ゆき『性の歴史学』不二出版, 1997, p51.
- [6]藤目ゆき『「慰安婦」問題の本質』白澤社, 2015, p.24.
- [7]藤永壯「植民地公娼制度と日本軍『慰安婦』制度」早川紀代編『植民地と戦争責任』吉川弘文館, 2005, p.37.
- [8]林葉子『性を管理する帝国』大阪大学出版会, 2017, p9.
- [9]金富子・金栄『植民地遊廓』吉川弘文館, 2018, p.ii.
- [10]上野千鶴子「戦争と性暴力の比較史の視座」上野千鶴子ほか編『戦争と性暴力の比較史へ向けて』岩波書店, 2018, p.1-2.
- [11]佐伯順子『「色」と「愛」の比較文化史』岩波書店, 2010, p.227. [初版 1998]
- [12]尾形明子「母・妻・娼婦としての『女』」岡野幸江ほか編『買売春と日本文学』東京堂出版, 2002, p.162.
- [13]金井景子「聴く男・語る女・書く男性作家 徳田秋聲『縮図』を読む」『男性作家を読む』新曜社, 1994, p.73.
- [14]金井景子「戦争・性役割・性意識」『日本近代文学』1994.10, p.103-115.
- [15]光石亜由美「従軍慰安婦」石川巧ほか編『戦争を読む』ひつじ書房, 2013, p.228-243.
- [16]小野寺あかね『「問うから聴くへ」, そして『慰安婦』から現代の性搾取へ』小野寺あかね・金富子編『性暴力被害を聴く』岩波書店, 2020, p.1-20.

### 付記

本論は、令和2年度戦略的個人研究(S20504)における成果の一部の報告である。

(受付日: 2021年7月15日, 受理日: 2021年8月2日)

### 内藤 千珠子 (ないとう ちずこ)

現職: 大妻女子大学文学部教授

東京大学総合文化研究科博士課程修了。

専門は近現代の日本語文学。

主な著書: 『帝国と暗殺』(新曜社, 2005), 『小説の恋愛感触』(みすず書房, 2010), 『愛国的無関心』(新曜社, 2015)。